（郵便局認可）

時事新報

第千三百七十八號　土曜日
明治十九年九月十一日
（甲、戌）
舊丙戌八月十四日

（西暦一千八百八十六年）

（日曜日休刊）　（定價金三錢）

大坂出張所移轉社告

當時事新報社大坂出張所の儀是迄同府東區高麗橋通五丁目卅四番地ゑ設置有之候處近來同出張所事務追々多端に相成り家屋の狹隘と感ぜ候ゑ付今般同府東區高麗橋通二丁目三十三番地ゑ移轉仕候——

東京市中の看客へ社告

當社時事新報賃約御購讀被成下候に付ては右代價の義ゑ纏て前金に申請くべき筈に御座候處當社の不行屆より東京市中ゑ限り是迄は兎角後金に相成り勝ちにて爲先に當社計算上の混雜は申す迄もなく定めて購讀者諸君の御手許ゑ於ても御不都合ありしおらんと恐縮の至に奉存候就ては自今成る可き丈け注意仕り時事新報代價い乾度前金お申請け右前金相切れ候前には必ず當社より時事新報代價受取人と伺候致させ次回の前金御拂入れを請求仕るべく候間其節右受取人へ引續き時事新報を御送附申上候事の要否如何を御沙汰被成下度候

時事新報

養才論

養才と申す問題は支那流の學者の毎度喋々する所ゑして其申條に曰く〳〵支那は春秋戰國に孟嘗春申信陵れ諸君あり擊劍扛鼎談天雕龍堅白異同など云へる樣々の藝能あるもの銘々に三千人はども抱へ置き智勇辨力の士と為て其氣を吐くことを得せしめたれど彼等も大に世の害を爲さざりしが降て秦の世に至り書を焚き儒を坑にして養才の道を誤まりたれど不平の氣民間に鬱積して愈ち亂階を生じたり云々と說く其語氣より察すれば彼輩が所謂養才の目的は國家有用の人物を養成するよりも寧ろ智勇辨力の士の毒螫を除きて其をして世の治安を害せしめざるに在るもの〻如し昔時外國交際の絶無なりし世の中には文物工藝之を他國に比して其進歩と促すの必要なく天下泰平を以て人間最上の望と爲せしが故に養才の目的も自然世の治安を保つの一方に歸せしものおらん當時に取りては無理ならぬ養才法おらんも是迄も今や東洋の諸國、中に就て我日本國は西洋文物の輸入に変はり政治學藝商工軍備長を取り精を撰み長を其智巧を爭はざる可らざるの運に際會ゑたれば養才法も亦大ゑ其趣と改め西洋文明國の文物藝術を目當てとして其現に發達し居る丈けに我才能を養いざる可からざるゑり國は就を爲して日本人は創造に短にして模擬に長ずるみを仕合はせゑれ他國人が多年幾多の勞費を拋ち千辛萬苦して工夫ゑたるものを一朝傍より模擬すると得ば發明の名譽は他國ゑ在るも其發明品の恩澤に均霑そるとと得て甚ざ德用なる可ゑおど云ふものもあらんかなれども凡そ他の發明に模擬して廣く之と實地ゑ應用するには之を創造する丈々の智巧おかる可らず國中の智巧淺薄にして新思想の士に乏ゑきと況は如何ゑる新說新案を聞見そるも之を實踐ゑ應用ゑて効驗を廣うすると能はざるゑり左れば今我國にて西洋の文物藝術を目當てとゑて行く〳〵之きと長短と競はんとおもるゑ當ては是非とも養才の策おかる可らず才を養ふて果しく其大成を期そるゑは其向ゑの人を儲待休養して常に外物の累を與へず一心一向ゑ其思想智巧を練磨せしむると要す然るに今日の有樣にては國家人才優待の實あきが爲め才學の士續かに學校に門と出づれば糊口の計に忙はゑくして事處そるに暇ゑらず不本意おがらも專門の業ゑ從事すると得ずして多年の修學と水泡に歸するもけあり或い潛心刻苦ゑて發明の端緒を得されども器械を購ひ材料を求むるの力おくして其新案を試むる能はざるものゑり就れも養才の道を得たるものに非ず特に近年に至りては政府の費途節減の沙汰もありて海外留學生も追々其數を減ずる由あれども學生の留學費、高ゑ知れたる少額にゑて爲めに生ずる所の結果は學生の身ゑ附屬して永遠日本國の表面に顯はを文物にゑれ工藝にゑれ或は政治法律の事ゑあれ外國人と競ひ內國人を利そるの用を爲そものあれば個ばかりの費用を養才に吝ひは我輩の喜ばざる所なり又海軍の學生が業を卒へて實地航海の演習と爲そゑ大西洋地中海等にまで遠航ゑ歐米諸國の砲臺軍艦造船所等を巡視し海軍上彼我れ勢と審にするを得ば兵學士の爲ゑい非常の活學問たる可しと雖ども此等の地方を巡航そるにゑ其費用少なからずとの申條にて從來の實地巡航は濠洲布哇等僻僻の地ゑ限るものゑ如し海軍擴張を急務として新軍艦の注文おゑゑ幾心そる折柄、其軍艦を指揮運轉する者れ養成法と怠たらば他日軍艦成るゑ及んも沐猴騎馬に跨るの患おゑや我輩の配慮する所おり蓋ゑ養才の法は文武と問はず其向きの人ゑ餘資と餘暇と其妙を極めて其奥ゑ達したるものゑり文士の著述等も畢生の心血と注ぎたるもの少おからず特に當時の大名中有爲の士人に保護と與へて其事業を大成せしめたるの例もあり物徂徠の如きは若干年月に一卷の書と著すを以て柳澤氏へ奉公と爲したるとあり又昔し佛人モンテスキユー氏も時の某貴人れ資給を得て萬邦精理を著述すると得たりと云ふ東西其趣を同うゑたる者と云ふ可し左れど今我國ゑ於て西洋文明國と其文物兵事工藝の長短と爭はんとするゑ當りて政府養才れ精神を以て勞費を吝まず效の目前に顯はれざるを顧みず內國に在ては學校教育博物館等の規模を大にし或は懸賞文を募りて大ゑ文士の競爭を促し或い文武の見習生を置きて〳〵海外諸國へ派遣し學士を優待して其榮譽を增ゑ發明者の資力ゑ乏しき者と助け文武の士を養成して其才華を煥發そると何れの點より考ふるも甚ざ大切の事おらんと信ずるおり

（以下次號）

官報

○大藏省告示第八十三號

東京金庫局及大坂金庫局出張所ノ金庫ハ本月十一日ヨリ當分ノ內午前九時開扉シ午後一時閉鎖ス

明治十九年九月十日　大藏大臣伯爵松方正義

○流行地虎列刺

流行地	月日	新患	死亡
京都府	九月八日	二十三人	十五人
內上下兩京區ニ新患三人新舊死亡五人			
大坂府	同	七十九人	七十九人
內四區西成郡ニ新患四十二人新舊死亡五十四人			
岐阜縣	同	四十一人	三十八人
內稻葉郡ニ新患十一人新舊死亡十三人			
兵庫縣	同	四十三人	四十三人
內神戶區ニ新患五人新舊死亡五人			
長崎縣	同	二十一人	二十八人
內長崎區ニ新患十五人新舊死亡七人			
埼玉縣	同	十九人	十五人
千葉縣	同	十一人	
茨城縣	同	三十八人	三十二人
	同	十八人	十八人
山梨縣	同	四人	四人
青森縣	同	八人	八人
秋田縣	同	五人	三人
福井縣	同	百三十七人	百三十七人
宮山縣	同	三十六人	三十六人
島根縣	同	九十二人	九十二人
岡山縣	同	十九人	十九人
廣島縣	同	十七人	十七人
山口縣	同	三十七人	三十七人
和歌山縣	同	十六人	十六人
愛媛縣	同	十一人	十一人
福岡縣	同	十二人	十二人
佐賀縣	同	十五人	十五人
西藏安國	同	三十二人	三十二人
小計新患九百三十九人新舊死亡六百十五人			
山梨縣	九月七日	八人	八人
山形縣	同	四十四人	十四人
島根縣	同	十四人	十四人
小計新患六十六人新舊死亡五十三人			
合計 新患千五人 新舊死亡六百六十八人			

○流行地外虎列刺　京都府丹後國去る五日より七日迄新患四十一人、新舊死亡十人」北海道札幌去る七日ゑ八日迄新患十一人、新舊死亡五人」群馬縣去る八日新患一人、死亡一人」栃木縣去る七日新患六人、死亡一人」愛知縣去る六日新患七人、新舊死亡六人」靜岡縣去る六日より七日迄新患十五人、新舊死亡三人」岐阜縣去る七日より八日迄新患六人、新舊死亡七人」岩手縣去る六日より七日迄新患十三人、死亡二人」鳥取縣去る七日新患三人」德島縣去る七日新患十一人、新舊死亡七人」大分縣去る一日より二日迄新患二十三人、新舊死亡十一人

○虎列刺實地調査成績（前號の續）

未發病者の發病前に他の病家又は患者若くい死體と關係しゑる時より發病に至る時間は左の三表の如し

未發病者自ら患者又は其の死體に接そゑる時より發病に至る時間

時間	人員	時間	人員	時間	人員
同時	四十一時	一五日	二二日	二十日	二
三十分	三十二時	四六日	二五日	廿二日	二
一時	四十三時	二七日	七日	廿四日	一
二時	六十六時	一八日	四日	廿五日	一
三時	一十七時	七九日	一日	廿七日	二
四時	八十八時	三十日	六日	三十日	一
五時	一二十時	一十一日	一	卅八日	一
六時	二廿三時	一十四日	三	卅六日	二
七時	三一日以上	五二十五日	一	五十日	二
八時	二二日以上	四八十六日	二	不詳	一三
九時	二三日以上	五一十七日	一		
十時	一四日以上	二二十九日	一		

未發病者自ら病家に往きたる時より發病に至る時間

時間	人員	時間	人員	時間	人員
十二時	二四日	一八日	二十五日	一十六日	一
一日	二八五日	五九日	一	二十八日	二
二日	一三六日	四十日	二	三十四日及不詳	二
三日	一四七日	六十四日	二	三〇	

未發病者の病家又は患者と間接の關係ゑりたる時より發病に至る時間

時間	人員	時間	人員	時間	人員
一日	二二四日	五十日	四	二十日	四
二日	三五日	八十五日	二	四十日	一
三日	一二七日	五十六日	一		

飲水と虎列刺とは關係　本項審査患者千四十五人の飲用したる水を調査する左の如し

井水五八	泉水三八	河水二百十九人	溝水一人
雨水一人	井水八百十六人		

井水と用ふる者總數八百十六人一家專用百七人、數家共用七百九人

井と雪隱との距離及患者の關係　井と雪隱との距離は虎列刺ゑ罹り死亡せしものゑ九百四人の中に於ゑ四百三十七人の內に於ゑ四百三十六人を見るに至り雪隱と虎列刺と數家共用の關係

審査患者一人

此の調査ゑ據れば意外の少數なるは住居の位置ゑ上表屋ゑ多く出でゑり即其

審査總數九百人

又本病は河ゑ住居する者無

河に沿ひて居しゑる者

以上は成蹟は

晴ゑ符合する

河水と用ひ

自然の勢なり

前年發病の家

七八中三十四

うたる家ゑ發病前の

と稱する者ゑ

審査總數九百人

二百二十八

雜報

○支那貿易　本年亞米利加ニゑ佛蘭西ゑ重ゑるもれは北海道產物の用として彼國に年々五百萬圓は古くより專ら中の頃い政府より圓の取引を爲せ同會長笠野氏が して遠く內地に京日本橋及び上先づ上海支店の と爲ゑ資急きて より近來は他の杯の委托販賣を賃の高きは萬國演等ゑて直取引ら一籌を輸そる

○秋田通信（九日）臣は去月三十日南秋田郡船川港土崎へ着同港發來りて郵便電信み樓上の休憩所署秋田始審裁判本部へ赴き歸途夫より旅館當某當地出發陸路ゑ由右に付青山本部長其他就れも戍辰の際楚囚と是は通信員も能く大臣の意想中一

○大坂出張所移轉社告

○流行地虎列刺

○虎列刺實地調査成績

○秋田通信